

はじめに

医学部の入学定員は平成 20 年度から連続して増加し、この 6 年間で 1,416 人の増員となった。この間、医学教育の現場では様々な変化への対応を求められている。さらにこれからは増員となった医学生が卒業を迎え、政策の効果についての検証が必要となる。本白書の 2010 年版では、医学部定員増の実態と課題について論じた¹⁾。ここでは、その後に実施したアンケート調査の結果も踏まえ、今後の課題と対応について述べる。

1. 医学部定員の変遷

昭和 48 年の無医大県解消構想により次々と医学部が新設され、昭和 56 年に最後の医学部新設によって、その総定員は 8,280 人のピークに達した(図 1)²⁾。その後、昭和 57 年および平成 9 年に削減の方針に転じ、平成 15 年には 7,625 人にまで減少した。ところが平成 16 年の医師臨床研修制度発足を契機に、地方大学の医師の激減と連動して地域医療の崩壊が問題となった。これに対応するため、平成 20 年度は医師不足が深刻な 10 県、医師養成総数が少ない 2 県等で合わせて 168 人の増員を実施し、平成 21 年度からは全都道府県で順次増員を行い、平成 25 年度には総定員が 9,000 人を突破した。増員の形態は様々であるが、多くは地域枠として設定され、奨学金の貸与とともに卒業後に一定期間の県内医療機関での従事を義務づけている。さらに加えて研究医枠や歯学部振替枠も設けられている。

平成 25 年度入学者から、十分な教育環境を整えることができる大学においては、現行基準の上限の 125 人を越え 140 人まで増員することが可能

としている³⁾。平成 25 年度の国公立大学 79 校の総定員は 9,041 人で最小 90 人、最大 135 人となっている(図 2)。平成 19 年度からの増員数は合計で 1,416 人であり、最も増員幅の大きかった 2 校では 6 年間で 50 人の増員となった。文部科学省は定員の増員期間については平成 31 年までの間とし、以降は医師養成数の将来見通しや定着状況を踏まえて判断する、としているが、今後も定員増を継続すべきか否か、多面的な検討と慎重な判断が求められている。

2. 定員増における課題

急激な定員増によって、医学教育の教育現場では様々な課題が浮き彫りになってきた。日本医学教育学会特別委員会では、医学部定員増に伴う教育現場の課題を明らかにするために、平成 23 年 6 月と平成 25 年 8 月の 2 回にわたり、全国 80 校を対象にアンケート調査を実施した。それぞれの回答率は平成 23 年 65.0% (52 校)、平成 25 年 83.8% (67 校)であり、2 回ともに回答したのは 50% (40 校)で、両方あるはいずれかに回答したのは 98.8% (79 校)であった。これらの調査の結果をふまえ、定員増の課題について挙げる。

(1) 学年別在籍者数の肥大化

2 回の調査ともに回答した 40 校について、学年別在籍者数の平均値の分布(図 3)をみると、2 回の調査の間に 6 年生以外は各学年とも在籍者が増加しているものの、いずれの年もピークは 2 年生にあり、平成 25 年には平均で 124 人、最多で 160 人が 2 年生に在籍していた。これは入学定員をはるかに上回る数であり、2 年生から 3 年生へ進級できずに滞っている学生の存在が考えられる。

(2) 教育環境の変化と対応

急激な学生数の増加に対して、講義室や実習室などの教育環境の整備が追いついていないことが

^{*1} Effect of Intake Increase

^{*2} Hiromi Seo 高知大学医学部附属病院総合診療部

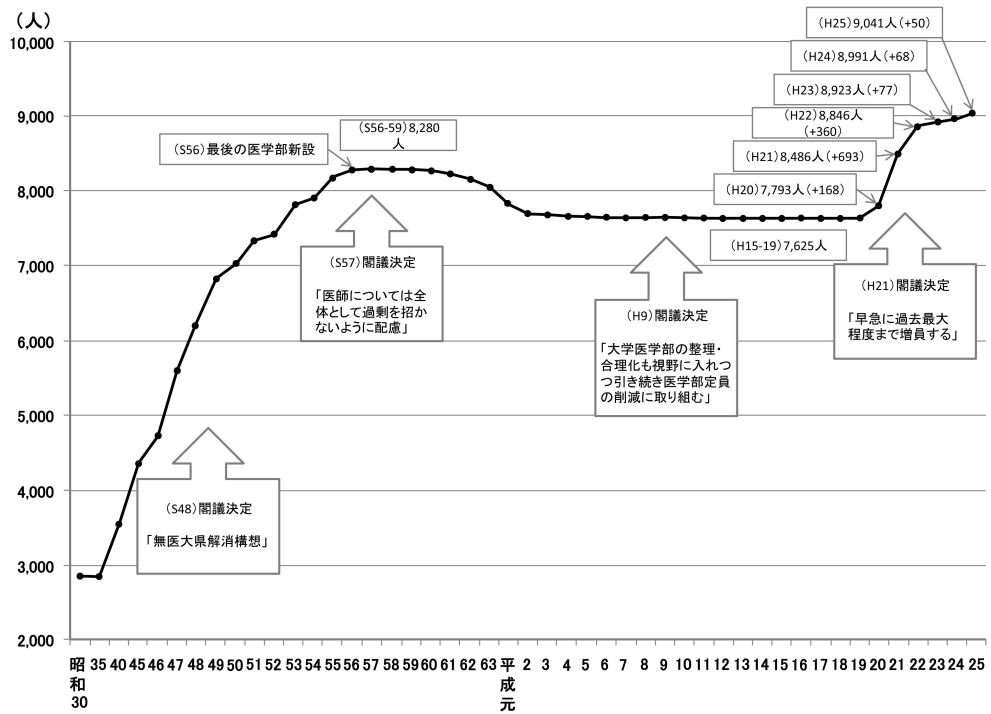


図1 医学部定員に関する経緯（文献2）より引用，一部改変）

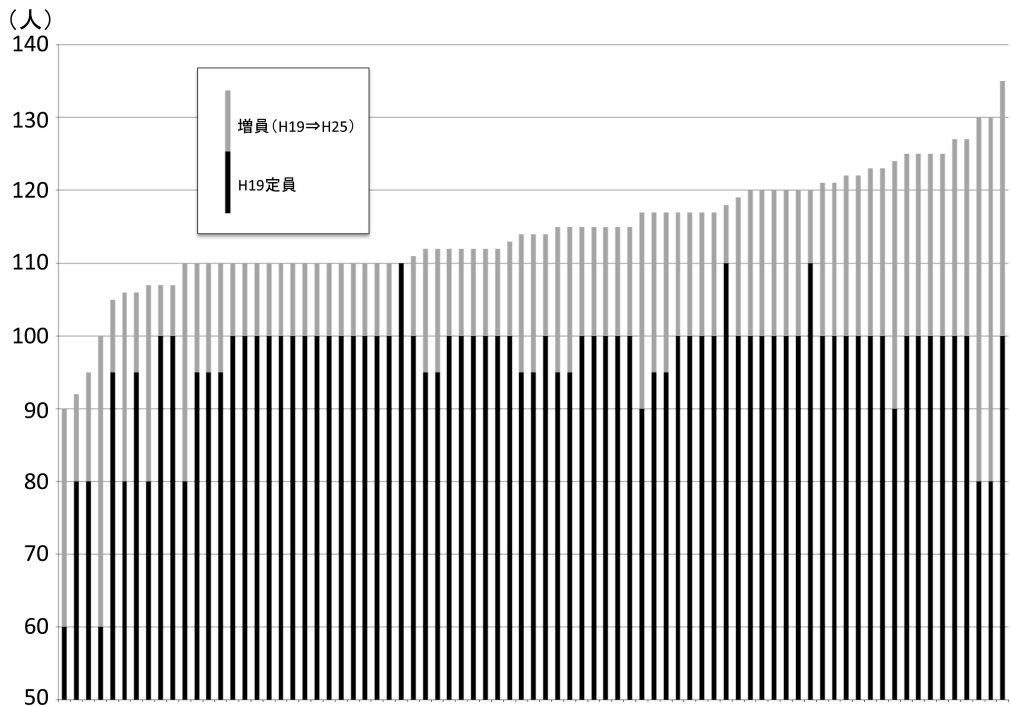


図2 平成25年度国公立大学79校の医学部入学定員の分布

(文献3)より作図)

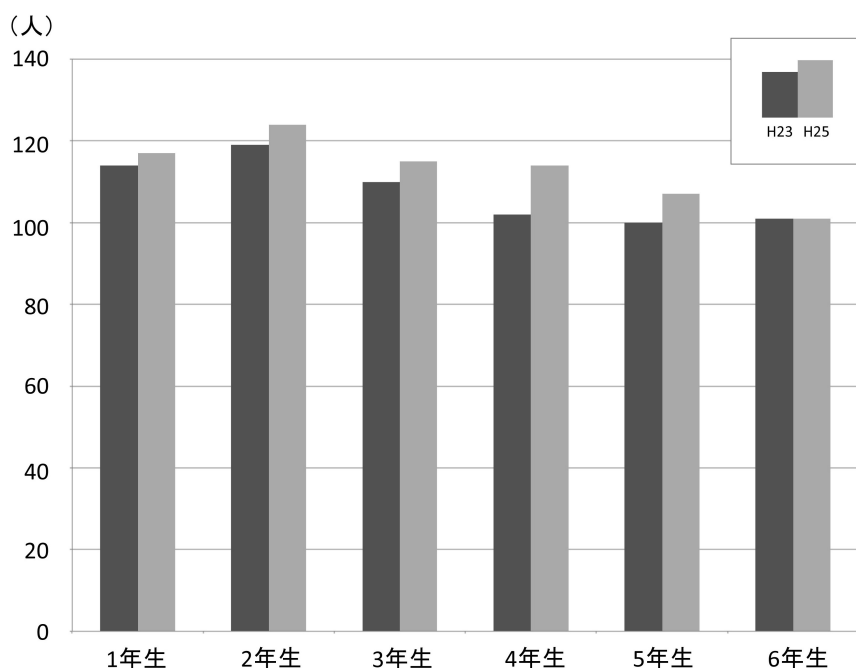


図3 学年別在籍者数の推移 (40校)

懸念される。定員増による教育環境の変化について、2回の調査ともに回答した40校の集計をみると、「教育環境について変化が生じた」と回答したのは、平成23年は58%であったのが平成25年には73%へと増加した。とくに講義室が手狭になったと回答したのは、平成23年には50%、平成25年には45%と、半数近くで講義室の狭隘化が指摘されていた。そこで講義室や実習室の拡充などの建物整備について尋ねたところ、「建物整備を実施もしくは計画中」と回答したのは、平成23年には75%、平成25年には73%であった。平成25年の整備状況をみると、顕微鏡やシミュレーターなどの教育機器については90%の機関で、ロッカールーム、トイレ、学生食堂、駐車場拡充などの環境整備については60%の機関で、それぞれ取り組みが実施あるいは計画されていた。

(3) 学生の授業態度および成績

学生の授業態度や成績の変化について、2回の調査ともに回答した40校の集計では、「学生の授業態度や成績に変化が生じた」と回答したのは平

成23年には40%、平成25年には45%であった。具体的には、授業態度の悪化（遅刻、欠席、私語など）や、学業不振（不合格や留年）が指摘されている。

定員増に伴う医学生の成績についてはいくつかの調査が行われている。前田らは医学科2年生における生理学の成績を11年間について検討し、定員増後の群では定員増前の群に比較して有意に成績が低下したことを報告した⁴⁾。全国医学部長病院長会議の「学生の学力低下問題に対するワーキンググループ」が平成24年4月～平成25年4月に全国80校を対象に実施した調査報告によると、多くの教員が学生の学力が低下していると実感しており、留年者は1～4年生で、休学者は1～2年生で増加していた。

(4) 教員の負担

授業の質的な変化や教員の負担の変化について、2回の調査ともに回答した40校の集計をみると、「授業の質や教員の負担に変化が生じた」と回答したのは、平成23年には55%であったが、平成25年には75%へと増加した。定員増が

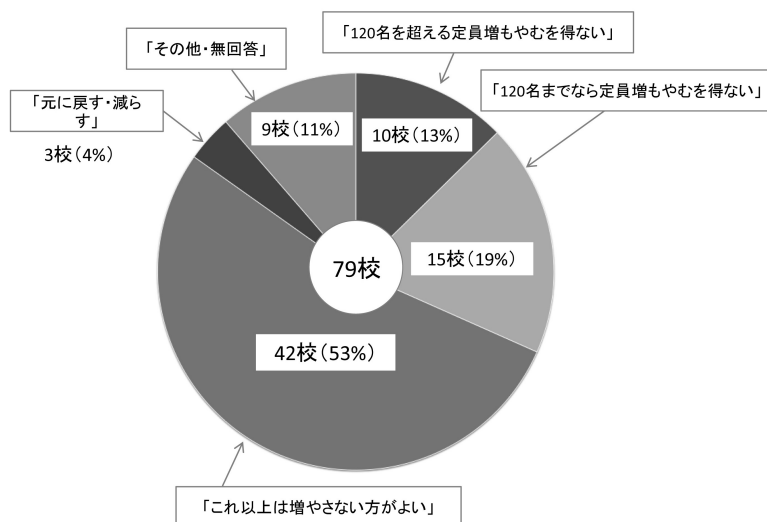


図4 今後の定員増に関する意向 (79校)

始まった当初は解剖実習をはじめとする基礎医学実習で負担増が指摘されていたが、学年進行とともにPBLチュートリアルチューター不足や、高学年では臨床実習への影響が指摘されている。

3. 今後の定員増の意向

今後の定員増について、平成25年の調査に回答した67校に平成23年のみ回答した12校を加えた79校の集計では、「120名を超える定員増もやむを得ない」と回答したのは13%で、「120名までなら定員増はやむを得ない」と回答したのは26%であった。これに対して、「これ以上は増やさない方がよい」と回答したのは53%、さらに4%は「元に戻す方がよい」と回答した(図4)。多くの医学部で定員増は限界に達していると考えられる。

4. 今後の対応について

医学部定員増は「医師不足の解消」を目的とした政策で進められてきた。医師数の変遷をみると(図5)⁵⁾、定員が抑制されていた時期でさえも年間4,000名以上の増加がある。平成24年度の入学定員を元に推計した資料によると、2029年にはOECD平均の人口10万対309人を超えると予測されている。しかしこのような単なる数合わせ

では、医師不足の要因とされる地域偏在や診療科偏在の問題は解決しない。医学部卒業生が社会で求められる「地域で活躍する医師」として育つための、多面的な取り組みが必要である。

わが国の18歳人口は昭和41年には249万人であったが、平成25年には123万人まで減少していると推計されている。これを「医学部入学者1人あたりの18歳人口」でみると、699人から136人に減少することになる。このように医学部入学への門戸は大幅に広がっており、入学後の学力低下は避けられないとする意見が多い。その一方で、「社会に求められる医師」を養成する観点から、入学者選抜においては学力だけでなく、医師としての適性評価など多面的な選抜方法についても検討が必要である。

今後、分野別認証評価と連動したカリキュラム改訂で臨床実習のウエイトがさらに増え、その対応として学内から学外での臨床実習へ移行が進むものと予測される。学外実習の強化は地域親和性の高い医学生を育て、将来、社会で求められる優秀な医師養成につながる事が期待されるため、地域医療機関の指導医の指導スキル向上や教育資源としての整備が急務となる。

さらに医学教育における学生の参画も重要である。平成24年12月に全日本医学生自治連合が全

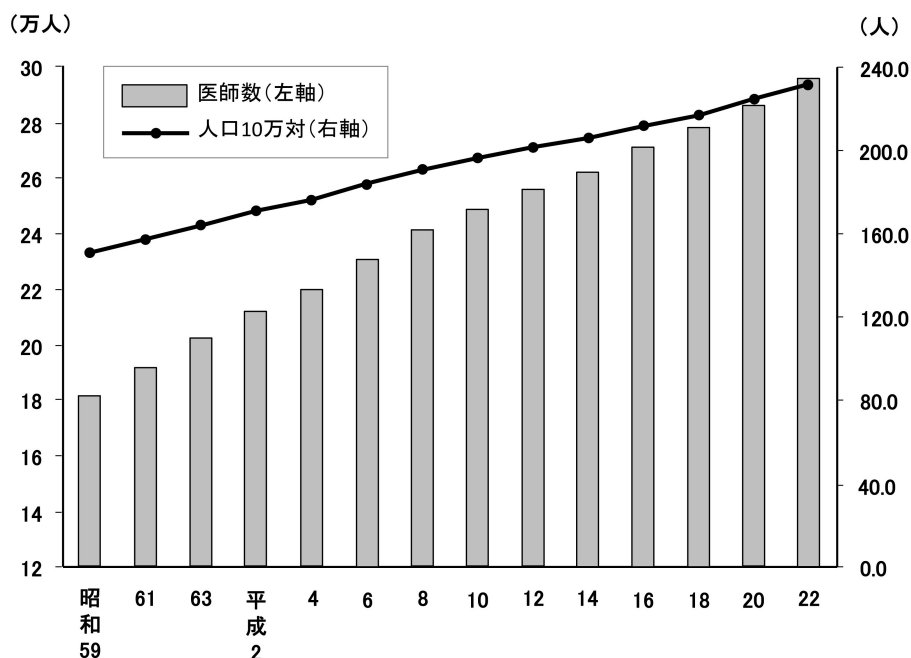


図5 医師数の年次推移（文献5）より引用，一部改変）

国の医学生を対象に実施した調査（51大学，2,079部の回答）では，図書館，講義室，自習室，駐輪場などのすべての項目において，どの大学の学生も不満と感じていると報告している⁶⁾。定員増に伴う環境整備においては予算やスペースなどの制約があるものの，学生の意見も取り入れた視点が必要である。

おわりに

医学教育の現場では定員増の「負の側面」が浮かび上がっている。しかしながら医療を支えるのは人であり，その育成に力を注ぐことは医療者である我々の使命である。そのために地域や行政との連携，大学間の連携によって問題解決にあたらなければならない。今後の医学部定員増については医師需給の観点のみにとらわれず，社会に求められる医師養成が達せられるよう，教育現場の視点からも熟慮した政策が求められる。

文献

- 1) 羽野卓三．定員増．医学教育白書2010年版（日本医学教育学会編），篠原出版新社，東京，2010，95-7.
- 2) 文部科学省．今後の医学部入学定員の在り方等に関する検討会（第1回）「これまでの医学部入学定員増等の取組について」，2010年12月．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/043/siryo/1300372.htm
- 3) 文部科学省．「平成25年度医学部入学定員の増員計画について」，2012年12月．http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/12/1328793.htm
- 4) 前田正信，羽野卓三．生理学筆記試験の成績よりみた医学部学生の学力低下．医学教育2013; 44: 71-6.
- 5) 厚生労働省．「平成22年 医師・歯科医師・薬剤師調査の概況」，2011年12月．<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/33-20.html>
- 6) 水野敬悟．医学部の入学定員増加がもたらした学校施設への影響－医学生の学校施設満足度調査から．医学教育2013; 44 Suppl: 103.